

ニホンナシ新品種「秋満月」 （「千葉K3号」）の特性と栽培方法

品種の特徴



- ・ 交配親：「豊水」×（「新雪」×「平塚16号」）
- ・ 9月中旬から10月上中旬に収穫できる品種
- ・ 700gを超える大果で、肉質は滑らかで多汁のため食味が良好
- ・ 目標収量：10a当たり5.4～6.4t
（着果数：7,700～9,200果×平均果重：700g）

開花期及び収穫期（農林総研）

品種名	開花期				収穫期											
	3月		4月		7月		8月			9月			10月			
	下	上	中	下	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
秋満月																
幸水																
豊水																
新高																

■：開花期間の平均（平成29年～令和2年、一部欠測あり）

□：最も早い開花始期と最も遅い開花終期の期間（平成29年～令和2年、一部欠測あり）

■：収穫期間の平均（平成28年～令和元年、一部欠測あり）

□：最も早い収穫始期と最も遅い収穫終期の期間（平成28年～令和元年、一部欠測あり）

受粉・着果管理

■ 開花時期は4月上中旬

- ・ 満開期は「豊水」とほぼ同時期で「新高」よりやや遅い

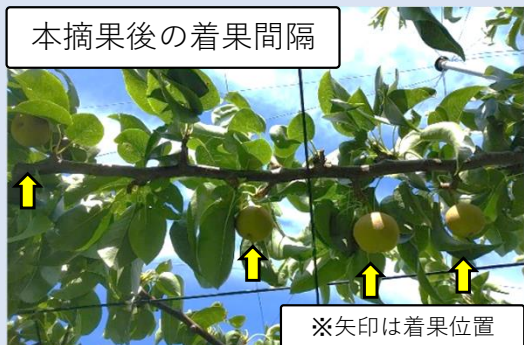
■ 「新高」以外の主要品種と交雑和合性がある

- ・ S遺伝子型はS₃S₉

■ 摘果は果実の向きと果形を優先して行う

- ・ 果実品質に番果による差は少ない
- ・ 軸折れがやや多いので、上向きの果台・果実を使わない
- ・ 側枝上での着果間隔は25～30cmとする
- ・ 予備摘果は「幸水」等の終了後（満開後30日以降）が良い

本摘果後の着果間隔



※矢印は着果位置

軸折れ



■ 樹勢は強い

- ・ 新梢が強く伸びる場合は夏季に適切に誘引する
- ・ 高接ぎした樹では樹勢が弱い場合がある

■ 主枝・亜主枝の中間部位からの新梢発生は少ない

- ・ ジベレリンペーストを、全摘花した花そうの副芽に満開後40日までに塗布すると、新梢発生が促進される（発生した新梢は硬くなりやすいので夏季に必ず誘引を行うこと）



■ 収穫適期は「豊水」用カラーチャート値で4程度

- ・ 着色が不十分だと糖度が低く、食味が低下する
- ・ ただし、みつ症の発生が懸念される場合は、やや早めに収穫する

表1 地域別「秋満月」の収穫時期（平成30年・令和元年産）

地域 (市名)	千葉	東葛飾					印旛	海匝	山武	安房	君津	農林 総研
		(市川)	(鎌ヶ谷)	(船橋)	(松戸)	(柏)						
収穫始期	9/27	9/23	9/23	9/23	9/17	9/28	9/27	9/23	9/17	9/15	9/29	9/17
収穫終期	10/1	10/5	9/30	9/29	9/26	10/13	10/4	10/3	10/14	9/20	10/1	10/7

注1) 平成30年と令和元年の2年間の平均値、収穫量が少なく1回で収穫した場合や収穫時期を確かめるため適期前後に収穫する場合も含まれる。

2) 地域に市名が含まれる場合は、市別に5戸以上の調査ができたために個別に標記した

3) 農林総研は平成29年、30年の平均値

■ 側枝の更新は6年程度で実施

- ・ 短果枝の着生・維持は良好だが、腋花芽着生は少ない
- ・ 目傷などで予備枝を確実に確保して更新する

■ 主枝・亜主枝の先端は強めに切り返す

- ・ 切り返しが弱過ぎると新梢発生が少なく、側枝確保が難しくなる

■ 着果管理の注意点

- ・ 短果枝の花芽が非常に多いので、花芽整理を行うのが望ましい
- ・ 果そう葉を摘葉することにより、花芽着生を制限することができる
- ・ 葉数が4枚以下の果台には着果させない（小果、低糖度）
- ・ 腋花芽は変形果が多く、糖度が低いので着果を避ける
- ・ 自家摘果性※があるので、自然落果が終わる満開40日以降まで摘果を遅らせると省力的かつ変形果を見分けやすい
- ・ 日焼けが発生する場合があるので、直射光が当たらない果実を残す
- ・ 日焼け部位にはみつ症が発生しやすい
- ・ 6月中旬頃に果実に袋（茶色2重クラフト紙）をかけることで、日焼けを軽減でき、外観がきれいに仕上がる

※自家摘果性は、開花後早期に多数の幼果が生理的に自然落果する現象



花芽整理の有無と開花状況



摘葉による果台の葉数制限



正常果（左）と変形果（右）



陽光面に発生した日焼け症状と袋かけの効果

■ その他の注意点

- ・ 高接ぎ樹の場合は、果実の大きさや糖度など品種本来の特性が現れるまでに2～3年かかる
- ・ 側枝を延長する場合は、先端付近に着果させない
- ・ 変形果の発生を減らすため、主枝基部への接ぎ木は避ける

■ 病害について

- ・ 黒星病は慣行の赤ナシ防除体系で防除可能である
- ・ えそ斑点病は病徴非発現性、黒斑病は抵抗性である

■ 生理障害について

- ・ 「豊水」と同様な水浸状のみつ症が発生する
- ・ 冷蔵による貯蔵障害（果肉褐変）が発生する場合がある
- ・ 生理的裂果、心腐れ、硬化障害は発生しない



みつ症重症果



貯蔵障害（維管束褐変・低温褐変）



■ みつ症の発生は「豊水」と同様の傾向

- ・ 「豊水」みつ症の発生がある場所での栽培は避ける（「豊水」でみつ症が発生しない圃場では「秋満月」のみつ症も少ない）
- ・ 「豊水」みつ症の多発年は「秋満月」のみつ症も多い
- ・ 多発要因も「豊水」と同様に気象条件（収穫前の高温乾燥、7月頃の低温）や土壌の過乾燥等によると考えられる
- ・ 「豊水」みつ症に比べ、外観からの判別がやや難しい

■ 現時点での対策（「豊水」の軽減策と同様）

- ・ 「豊水」でみつ症が発生しない圃場で栽培する
- ・ かん水を行い、乾燥ストレスを軽減させる

表2 「秋満月」と「豊水」のみつ症発生の関係

みつ症発生戸数		秋満月	
		あり	なし
豊水	あり	20	28
	なし	1	20

注1) みつ症の発生状況が未記載の生産者は除外した
2) 平成30年と令和元年の合計延べ人数

表3 「秋満月」と「豊水」のみつ症発生程度の推移（農林総研）

品 種	みつ症発生程度							
	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30
秋満月	多	多	多	少	少	多	多	多
豊水	多	多	多	少	少	多	中	多

注) 軽症を含めたみつ症の発生程度を多、中、少の3段階で評価した
両品種ともに農林総研内のみつ症の発生が多い圃場での調査結果

発行年月：令和3年3月（令和5年2月一部修正）

発 行：千葉県・千葉県農林水産技術会議

問合せ先：千葉県農林総合研究センター果樹研究室

電 話：043-291-9989

「私的使用のための複製」や「引用」など著作権法上認められた場合を除き、本資料を無断で複製・転用することはできません。